

# 出会った時のあいさつ言語行動に伴う非言語行動 — 一日中対照研究 —

施 暉

## Body Language Accompanying Greeting Courtesy: A Comparative Study of China and Japan

Hui SHI

Through empirical investigation, the body language of greeting courtesy in China and Japan is compared and studied and the findings are as follows:

Firstly, when meeting those who are of the same gender and are not very intimate, both Chinese and Japanese people mainly smile and nod their heads. The frequency of smiling during greeting is highest, showing a high degree of coincidence. Smiling can be used either alone or in conjunction with other body language such as nodding, bowing, or raising hands, which serves a social function as a kind of communicative language behavior. The overwhelming majority of male Japanese college students like to "raise hands," which constitutes a strong contrast to Chinese people.

Secondly, when meeting those who are of the opposite gender and are not very intimate, both Japanese people (the social group besides college students) and Japanese college students show a smaller tendency of smiling, while their ratio of nodding and bowing significantly increases. Chinese, however, still mainly smile and nod their heads, which could be deemed as the main body language for Chinese people when communicating.

Thirdly, when meeting those who are of the same gender and are very intimate, both Chinese and Japanese have an increased frequency of physical contact. Japanese males mostly favor a handshake or a smile, which is very obvious. As for Chinese men and women, distinctions exist. Chinese males like shaking hands or clapping shoulders, while females embrace each other distinctively. If compared to that of the Japanese, the Chinese embrace is more prominent.

Fourthly, compared with the body language used when meeting intimate acquaintances of the same gender, the body language of people in both countries are more rich and colorful when meeting intimates of the opposite gender, and obvious similarities exist in both countries. However, the Japanese embrace and Chinese kiss each has its dominance, mainly because the subjects involved are couples in love.

In a word, compared to Japanese, Chinese people do not mind body contact, especially when the relationship is intimate, and the more intimate the relationship, the higher the rate of physical contact there is. This difference shows that the Chinese and Japanese have different emphases on human relations and physical distance.

- I. はじめに
- II. 先行研究
- III. 調査の概要と方法

- IV. 想定された相手について
- V. 出会った時の非言語行動
- VI. 終わりに

### I. はじめに

あいさつ言語行動においては、あいさつ言葉が中心的な働きをすると同時に、参与者の音調、顔の表情、態度、視線、姿勢、身振り、手振り、相手との距離等も随伴したり、単独で現れたりしながら、そ

れら全てがあいさつ「言語行動」に組み込まれている。つまり、人と人がコミュニケーションをする際に、言語的側面と非言語的側面は有機的に結びつけ合いながら、伝達機能と人間関係の構築、維持の

働きを担っている。

非言語行動の研究は動物行動学、言語学、文化人類学、比較行動学、心理学などの学際的な研究対象として行われていたが、本格的な研究は20世紀中葉に始まり主にTrager(1958)のParalinguistics(副次言語学)、Birdshstell(1970)のkinesics(身体動作学)、Hall(1963,1976)のproxemics(近接空間学・距離論)をはじめとする<sup>1</sup>、いわゆる接近学、空間論の分野で幾つかの研究、実証が進められており、注目に値するものである<sup>2</sup>。これらの先行研究によれば、非言語行動は人間の伝達行動において大変重要な役割を果し、不可欠な要素であることは否定できない。しかし、コミュニケーションにおける非言語行動をデータとして実証的に記録、分析することは困難でそれが研究の障碍の一つとなっているため、かかる研究の蓄積は少ないのが現状である。

同じ言語文化に属する人々が取っている行動様式には共通性がある、一定の規則性、パターンも見られる。従って日中両国それぞれの文化に根ざした非言語行動には、おのおの独自のものも存すると考えられてコミュニケーション・ギャップを惹起する一因となっていることも多く、異文化理解、比較言語文化研究という視点からの成果も待たれ、十分に吟味、研究する必要がある。小論は、まずあいさつ言語行動と非言語行動に関する先行研究を整理した上で、日中両国のあいさつ言語行動における非言語行動、主に出会った時の接触を取り上げて記述、分析しようとする目的である。

## II. 先行研究

### II. 1 あいさつ言語行動

日本ではあいさつ言語行動に関する研究は、そのアプローチとして以下のような九種類ほどあげることが出来る。つまり、①言語学的考察、②社会言語学的考察、③外国語との対照研究的考察、④言語行動学的考察、⑤語史的考察、⑥動物行動学的考察、⑦民俗学的・方言学的考察、⑧文化人類学的考察、⑨礼儀作法・マナーからの考察などである<sup>3</sup>。一方、中国で社会言語学、言語文化学などの立場から論じた『礼貌语言(1989)、『文化与交际』(1994)、『礼仪与中国文化』(2001)などが挙げられる。また、毕继万(1995)、徐萍飞(2001)などにおいては、呼称、Face、礼儀作法などをあいさつと関連付け、

英語教育及び異文化交流におけるあいさつことばを巡って分析、記述が行われている<sup>4</sup>。

### II. 2 あいさつ非言語行動

日本では主に三つの視点から考察されている。一つは西原(1984)、中野・カーカップ(1985)、奥田(1997)等の日英教育、翻訳から論じたものである。二つ目は人類学、民俗学からの視点である。例えば、多田(1972)は日本人のしぐさを通じて日本文化を捉えるために『しぐさの日本文化』を書き上げている。この流れを受け継いで野村(1996)の『身ぶりとしぐさの人類学』、菅原・野村(1996)の『コミュニケーションとしての身体』などでは、日本人のしぐさを中心に据えて異文化でのしぐさにも触れつつ考察している。三つ目は東山(1995)、榎本(2000)、久保田(2006)などの異文化間コミュニケーション、比較文化からの考察である<sup>5</sup>。

一方、中国では二つのアプローチが見られる。つまり、①外国語教育、特に異文化間コミュニケーションの促進などという目的を出発点としてアプローチしている。②言語学、社会文化学的アプローチである。例えば、社会文化学的アプローチは主に人間の非言語行動をコンテクスト、文化型などとの関わりから見ていく中で社会、文化的要因にどのように影響、規制されるのかを明らかにしようとするものである<sup>6</sup>。

以上、列挙した先行研究から分かるように、あいさつに関しては、日本では量といい、質といい、著しい成果が挙げられているが、中国語との比較研究は極少数であり、しかも個別的なものに偏っている。また、非言語行動をめぐる実証研究に基づき、日中対照を行った研究は管見するところ、見当たらないようである。一方、中国ではいずれも概説的、個別的考察であり、あいさつ言語行動及び非言語行動を体系的、総合的に行われたものは非常に少ない。特に事象に基づいて、日本語のあいさつと対照した研究は皆無と言っても過言ではないのが現状である。従って、本論文では、先行研究を踏まえつつ、アンケート調査を基にして日中両国語におけるあいさつ非言語行動についての比較研究を行い、それぞれの特徴をより明確に把握しようとする。これらの解明によって日中異文化の理解に益することが大であろう。

### Ⅲ. 調査の概要と方法

調査方法は主にアンケート用紙を用いる方法のほか、面接調査と観察調査も加えた<sup>7</sup>。実施は2004年12月～2014年8月にかけて、日本人と中国人合計680名を対象に調査を行った。調査地域と対象は表1の通りである。

表1-1: インフォーマントの内訳

	所属	男性	女性	合計
日本人 (広島)	社会人	75	85	340
	大学生	88	92	
中国人 (蘇州)	社会人	73	87	340
	大学生	75	105	

表1-2: 各年齢層の分布

		20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
日本人	全体	170	65	23	32	31	19	340
	男	83	27	11	16	14	12	163
	女	87	38	12	16	17	7	177
中国人	全体	170	60	31	24	29	26	340
	男	70	28	15	11	14	10	148
	女	100	32	16	13	15	16	192

本論文では出会った時のあいさつ言語行動に伴う非言語行動を中心に上げ、日中両国について比較対照を行う。つまり、人と出会って如何なる身体的非言語行動をとるのか、更に身体接触があるか否か、あるとすれば、どのように、どのような身体接触がなされるのか、などの点に焦点を当てそれぞれの使用実態、頻度の多寡などについて検討する。

以下は主にあいさつ言語行動における日中両国の非言語行動を巡って、「親疎」「男女」を中心とする視点から考察してみる。アンケート調査は以下の手順を踏んで行った。具体的な質問に入る前に、まず、質問で想定してもらう相手は、次のような性別と親疎の条件に合う4人を設定する。

Aさん: 顔見知りであるが、あまり親しくない同性の人。以下「Aさん」(疎・同性)と略す。

Bさん: 顔見知りであるが、あまり親しくない異性の人。以下「Bさん」(疎・異性)と略す。

Cさん: 最も親しい同性の人。以下「Cさん」(親・同性)と略す。

Dさん: 最も親しい異性の人。以下「Dさん」(親・異性)と略す。

上のような4人がそれぞれについて、自分とどのような関係を持った人かを、次の選択肢の中から選んでもらった。

表2: 自分との人間関係

①学校(時代)の友人	②近所の人	③同僚	④仕事上の知人
⑤兄弟姉妹	⑥親子	⑦配偶者	⑧学校のクラスメート
⑨その他			

設定した場面は、人と道で出会い、あいさつをし、並んで歩き、別れるという一連の会話の流れの中で捉えるものである。以下は、出会った時のあいさつだけを取り上げて分析する。Aさん～Dさんを相手として、以下の調査項目を設定した。

「あなたが一人で道を歩いている時、帰省して間もないAさんに会ったとします。その時、あいさつ言葉のほかに身振りであいさつするとしたら、どのようにしますか」。

次の「身振りの選択肢」の中から適切なものを選んで、三つまで記入して下さい。

### Ⅳ. 想定された相手について

調査項目で得られたAさん～Dさんの回答者との関係について、その割合は下記の表の通りである。

#### 1. Aさん (疎・同性)

	日本人		中国人	
	社会人	大学生	社会人	大学生
近所の人	41.3	25.6	28.1	10.8
仕事上の知人	33.2	1.6	11.2	4.6
学校のクラスメート	14.2	69.2	10.8	72.6
同僚	12.4	3	50.5	/
その他	/	0.6	/	12.7

#### 2. Bさん (疎・異性)

	日本人		中国人	
	社会人	大学生	社会人	大学生
近所の人	37.1	16.5	16.3	15.2
仕事上の知人	28.7	5.1	20.6	3
学校のクラスメート	11.5	70.8	14.1	75.6
同僚	13.7	6	49.4	/
その他	9.3	1.6	/	6.7

## 3. Cさん（親・同性）

	日本人		中国人	
	社会人	大学生	社会人	大学生
同僚	28.2	1.5	22.9	6
学校の友人	26.6	72.9	12.5	54.6
親子	18.3	1.2	34.7	1.3
兄弟姉妹	14.2	10.7	16.7	33.8
仕事上の知人	5.6	0.2	7.8	1.3
その他	5.5	8.8	/	0.7
近所の人	1.6	4.7	5.3	4.5

## 4. Dさん（親・異性）

	日本人		中国人	
	社会人	大学生	社会人	大学生
配偶者	46.3	3.2	55.6	/
兄弟姉妹	21.3	26.3	27.6	30.2
学校の友人	13.6	45.6	15.3	38.4
その他	19.2	25.2	1.8	32

AとBでは、日中の大学生はクラスメートや学校の友人などを中心に相手を設定しているのに対して、社会人は日本人が近所の人、中国人が同僚を中心に相手を設定している。Cでは社会人は日本人が学校の友人と同僚、中国人が同僚と親子を中心に、Dでは社会人は両国とも配偶者、兄弟を中心に相手が設定されていた。このように選んだ人間関係の差異は選択率の高低にも影響するかと考えられる。故に、考察に際しては、それを考慮に入れて行う必要もある。なお、「その他」は特に日中の大学生が高い率で「恋人」と答えている。これは大学生の身体接触における非言語行動の選択などに関わることもある。

## V. 出会った時の非言語行動

調査項目では、道で相手に出会った時の最初のあいさつ非言語行動を、身体の距離、接触を含めた次のような選択肢を挙げて質問を行った。

表4：出会った時の非言語行動

①相手を見て微笑み	②軽く手をあげる	③会釈する
④お辞儀をする	⑤握手する	⑥相手の肩に手をおく
⑦相手の肩をたたく	⑧相手を抱く	⑨頬擦りする
⑩キスをする	⑪その他	

以下はAさん～Dさんのそれぞれを相手とした場面ごとの結果を、主として男女別のヒストグラムによって図示する<sup>8</sup>。

## 1. Aさん（疎・同性）の場合

調査結果は図1（日本人の社会人、大学生）、図2（中国人の社会人、大学生）に示している。

図1

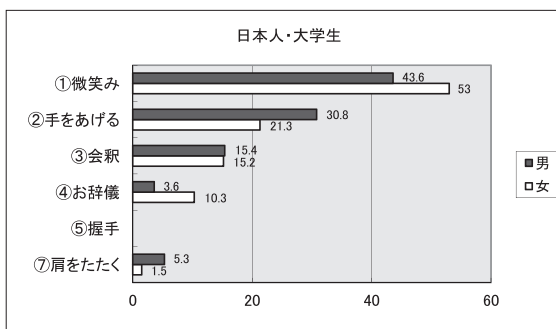
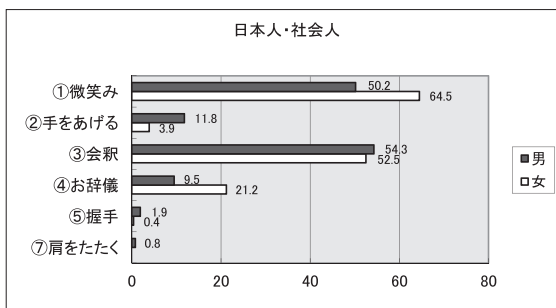
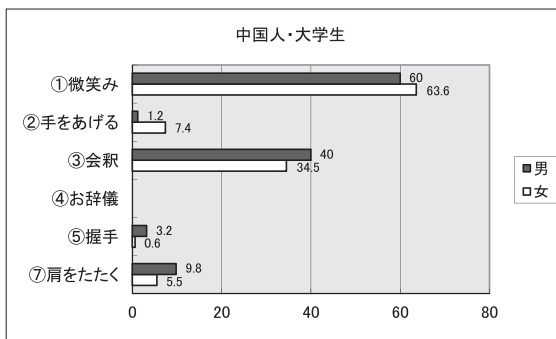
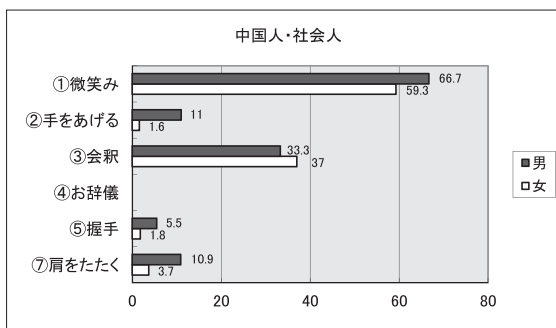


図2



日本の社会人は①「微笑み」と③「会釈」に集中しており、各々半数以上を占めるのに対して大学生



は①「微笑み」と②「手をあげる」を中心に選択し、③「会釈」が社会人に、②「手をあげる」が大学生に偏る傾向が著しく見られる。社会人では、男性で③「会釈する」が54.3%、女性で①「微笑み」が64.5%それぞれ一番高い率となっている。次いでこの二つが入れ替わって男女各々の第2位となっている。疎・同性の相手に対して①「微笑み」と③「会釈する」が社会人の主な身振りであることが分かる。

一方、大学生では男女共に①「微笑み」と②「手をあげる」がそれぞれ第1位、第2位を占め、両者を合せて7割以上を上回っている。つまり、大学生は社会人で2位だった③「会釈」に取って代わった②「手をあげる」が①「微笑み」と共に中心的非言語行動として選択したのである。更に、年齢別に見ると(図は省く)、③「会釈」は年齢が高くなるにつれて多くなり、逆に②「手をあげる」が若い人ほど、特に男性に多くなっている。また、「お辞儀」は男性より女性に多く、中年層、高年齢層より壮年層で高い比率を示している。つまり、年齢が上であるほどより改まった、丁寧な「お辞儀」が増える傾向が窺える。

「Aさん」(疎・同性)の場面では、身体接触を伴う非言語行為がほとんど適用されずに、①②③④のようにいずれも距離を置いた非言語行為を選択したことが明らかとなった。とりわけ日本では社会化した「握手」は皆無か或いはそれに近いという結果で、中国人と対照的である。日本人の身体接触の比率は低いものの、⑦「肩をたたく」は女性より男性の方がやや高い。また、⑨「握手」は社会人のみに使用され、特に高年齢層で顕著に増えることが目立っている。

中国人の場合は、社会人、大学生と男女いずれも①「微笑み」と③「会釈」に集中し、合計してそれぞれ9割強に達している。性別差と年齢差は殆ど見られない。中国人の「微笑み」と「会釈」があいさつ言語行動と共に表出され、定型化されている傾向を表している。更に言えば、「微笑み」と「会釈」はこのような場面における中国人の主流の非言語行動であると言えよう<sup>9</sup>。

また、日本人の大学生によく見られる「手をあげる」が中国人には1割以下とあまり見られないことも注目に値する。⑤「握手」は日本人、中国人ともに、僅かであるが、中国人、特に男性の方がやや高い。更に、日本人と比べて中国人の身体接触行為で

ある「肩をたたく」が突出していることにも注目を要する。いわば、中国人は日本人ほど身体接触の非言語行動を憚らないように思われる。

以上のように、日中両国における「微笑み」が最も高い率を示したということは「微笑は問候儀式中の一個共同特徴」(微笑はあいさつの共通した特徴である)<sup>10</sup>との指摘の有力な証左とも言ってよい。日本人の「微笑み」について欧米人にとっては理解しがたいものもあると指摘される<sup>11</sup>。その理由の一つとして「日本人の会話や対話にあっては、必ずしも自分の考えや意見を主張し合うことが目的ではなく、むしろ会話・対話を通して良好な人間関係を築くなり、保つなりすることの方が重要なのだ。そしてそのためにはできるだけ打ち解けて心が通い合うようにと、まず何よりも相互の『緊張緩和』が図られる。その際、日本人の『笑い』や『微笑み』がまさにそうした緊張緩和剤の役割を果たすのである」と言及されている<sup>12</sup>。

ここでもう一つ注目すべきことは中国人には選択されない、日本的な非言語行動の「お辞儀」である。中国では、最後の王朝-清朝の崩壊と共に何千年も続いた封建時代の繁雑極まりない儀礼も終焉を迎えた。辛亥革命によって建立された国民政府-中華民国では1912年8月17日に旧礼制度を廃棄し、新礼法を制定、推進、普及するために、二章七箇条よりなる『礼制』が公布されたとされる<sup>13</sup>。それは封建時代の「叩頭礼」の廃止と「脱帽とお辞儀」という新礼の提唱を主旨とするものである。その中では「男性の礼法は脱帽、お辞儀と為す」と明文文化されている。当時、新しい儀礼としては「お辞儀」と共に「握手」「挙手」「拍手」なども並行して、実施されるようになった。これらは「文明儀礼式」として唱導され、近代中国の新たな礼儀作法、儀礼として確立された。しかしながら、この新しく生まれた「お辞儀」は今日に至って特殊な場面で偶像、霊などを礼拝する時のみ用いられている<sup>14</sup>。これは今回の調査で中国人の「お辞儀」の回答が全くなかったことから裏付けられている。「お辞儀の国」<sup>15</sup>、「お辞儀の民族」<sup>16</sup>とも言われる日本と対照的である。また、「身振り言語」として誰にとってもすぐに目につくのは、ドイツ人(欧米人)の「握手」と日本人の「おじぎ」という挨拶の違いである」との指摘もある<sup>17</sup>。その違いについては、「日本人はふだん人と人との触れ合いを大切にし、身近に接しているので、挨拶のさ

いには却って互いに一定の距離を置く『おじぎ』という形をとる。それに対して欧米人はふだん互いに距離を置きながら交際しているので、挨拶のときには逆に近づき、手と手を直接触れ合う『握手』という形をとるのだ」と説明されている<sup>18</sup>。

また、日中両国の対人関係に対応する「心理的と空間的距離」、「敬意と親愛」のどちらに重点を置くかという点で異なっている。日本人と比べて中国人の身体接触行為である「肩をたたく」「握手」などが多く選択されている。これは相手への関心の高まり、一体感を味わえるからであろう。「同性之间的接触则没有什么特别的含义。外国男学生一旦发觉他们的男朋友想要拉他们的手或搂他们的肩，总是马上拒绝。而中国小伙子的这种行为仅仅表示友好，没有特别的意义」（略訳、中国人の若者同士間の手を取ったり、肩を叩いたりするという身体接触行為は友好の気持ちを表すのみで、特別な意図はない）<sup>19</sup>と説かれているように、親しい同性同士の身体接触は単に互いの親しさの表れであり、決してそれ以上の意味合いは込められていない。つまり、中国では友達同士（普通同性に限る）がその友好関係を示すために、出会って相手の「肩をたたく」という身体接触行為を忌憚なく行うのである。

## 2. Bさん（疎・異性）の場合

図3

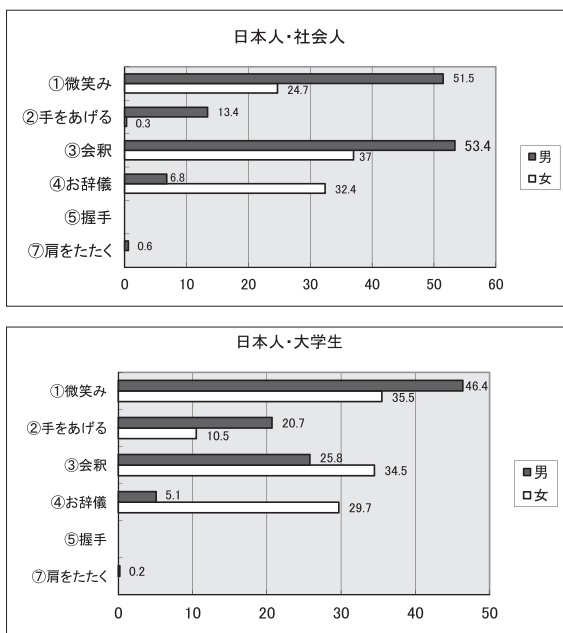


図4

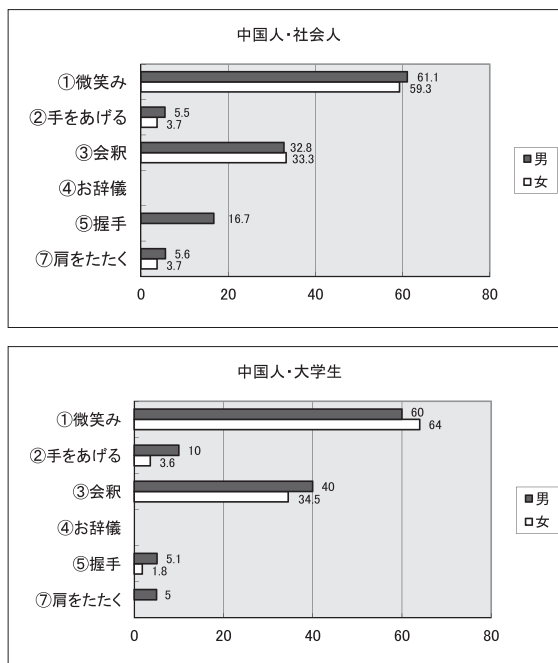


図1と比べると、日本人の社会人の男性では、殆どそれぞれの各比率が変わらないのに対して女性では、③「会釈」が第1位となり、それに次ぐのは④「お辞儀」と①「微笑み」である。つまり、社会人の女性は疎の異性に対して「微笑み」が大きく減り（Aさん64.5%、Bさん24.7%）、「会釈」と「お辞儀する」が増加することに留意すべきである。年齢層別構成を見ると、「微笑み」が壮年層でやや低下し（中年55.7%～56.2%、壮年34.5%～23.2%、老年38.8%～38.6%）、その減少には相手の性別が要因となっているように思われる。

一方、大学生では男女ともに「手をあげる」が1割程度減り、その分「会釈」が増える傾向にある。更に細かく見てみると、女性では社会人の女性と同じように「微笑み」が減少し（Aさん53%、Bさん35.5%）、「お辞儀する」が顕著に増えている。つまり日本人、特に女性は性別によってとる非言語行動の差異が明らかに現れており、疎の異性に対して、より慎重な、遠慮深い、謙虚な態度で振舞おうとする傾向が見られる。

これに対して中国人では社会、大学生ともに図2と同じ傾向を示し、主に①「微笑み」と②「会釈する」に集中しており、性別差、年齢差は殆どないようである。

日中両国を比べると、疎の関係にあるAさんとB

さんに対して、性別の如何にかかわらず「微笑み」と「会釈」が主流となる中国人と、AさんとBさんの性別の違いによって非言語行動を使い分ける日本人（特に女性が著しい）とは対照的である。また、日本人、中国人は共に疎の相手に対して「会釈」を多用し、「隔たり」をもって一定の距離を保とうとするのが対人関係の基調である。しかし、中国人は日本人より親愛の表現として物理的隔たりを取り除き、握手を求めたり、肩をたたいたりする率がやや高く、対人距離はより近い空間距離指向であると読み取れよう。

### 3. Cさん（親・同性）の場合

図5

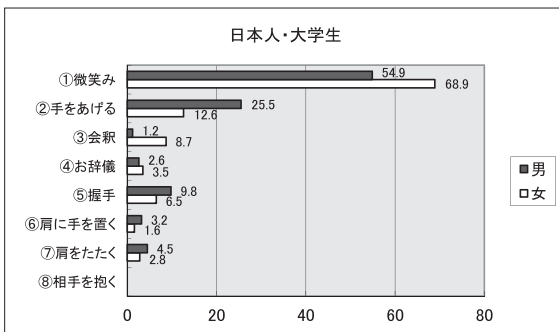
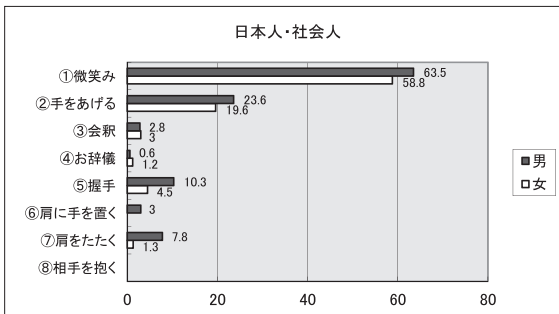
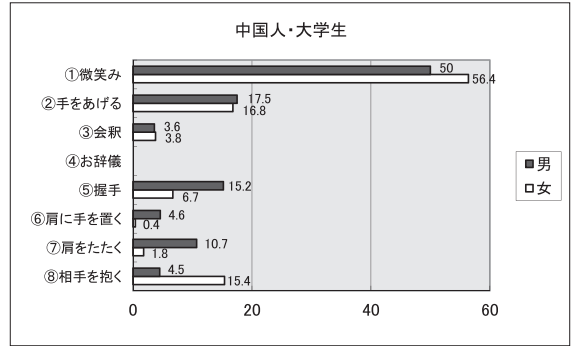
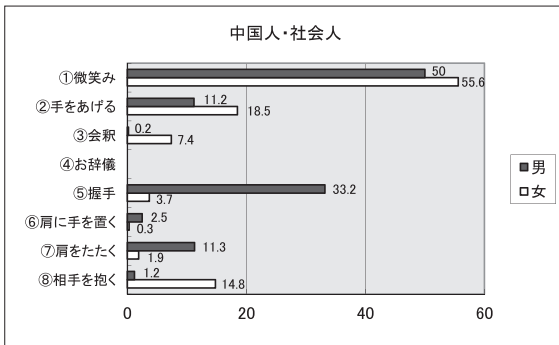


図6



Aさん、Bさん（疎の間柄）と比べると、親しい関係にあるCさんの場合は、日本人、中国人ともに身体接触度の高い選択肢が増え、日本人⑤⑥、中国人⑥⑧が新たに選択されるようになった。「疎」ほど「親」は身体接触行為を憚らないように見える。

日本人の社会人では、同性という条件で一致するAさんと比べて、男女共に「会釈」が著しく減少する（男性54.3%～2.8%、女性52.5%～3%）と同時に「お辞儀」も減り、替わって「軽く手をあげる」が増える傾向にある（男性11.8%～23.6%、女性3.9%～19.6%）。ここで注意したいのは、筆者は博士論文の中では「手をあげる」が男性、「手を振る」が女性にそれぞれ多用され、性別差が明確に示されている点を指摘したが<sup>20</sup>、今回は特にこの二つの区別をせずに、同じく②「軽く手をあげる」に一括して扱うこととした。

一方、大学生では「手をあげる」と「会釈」がやや減り、その分、「微笑み」と相手に触れる非言語行動が多く選択されている。⑤「握手する」、⑦「肩をたたく」は特に男性の方が多くて注目を要する。また、社会人、大学生では⑤「握手」⑦「肩をたたく」⑥「(相手の)肩に手を置く」という順で選択することが共通であるが、両者ともに接触度の高い「相手を抱く」はゼロである点が興味深く、中国人と対照をなしている。なお、社会人、大学生を問わず、男性の「微笑み」の比率が高くなっていることが指摘できる。

中国人は日本人と違って「疎」のAさん、Bさんに対する非言語行動との間に大きな差異を見せている。つまり、社会人、大学生も男女とも、日本人社会人と同じ傾向を示し、「会釈」が大きく減り、替わって「手をあげる」と身体接触行為が増加している。「握手する」と「肩をたたく」は男性に、「相手を抱く」は女性に偏って、性別差が目立っている。

全般的に言えば、中国人は日本人より相手に触れる非言語行動の比率が高く、特に、「相手を抱く」を全く選択していない日本人と対蹠的な差異が注目される。更に見てみると、以下のことが指摘できよう。「握手する」は特に社会人の男性が著しく高いこと、Aさん、Bさんに対しては現れなかった「相手を抱く」は女性が（社会人も大学生も）1割以上に及んでいること、という二点となる。これは人間関係の親しさに起因するものであろう。いわば、身体接触の非言語行動をとるか否かは人間関係の如何に関わるところが大きいように思われる。

#### 4. Dさん（親・異性）の場合

図7

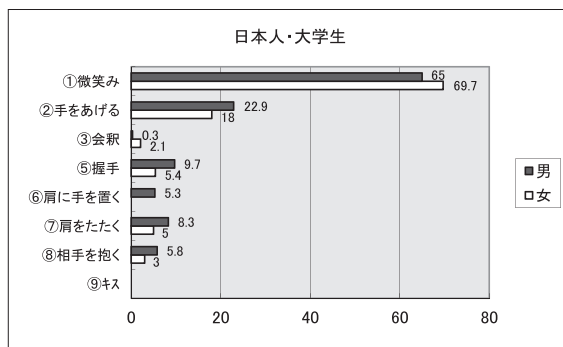
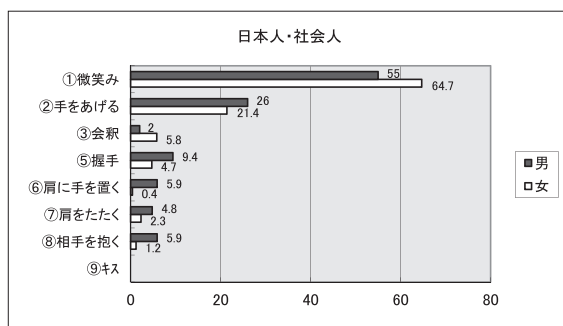
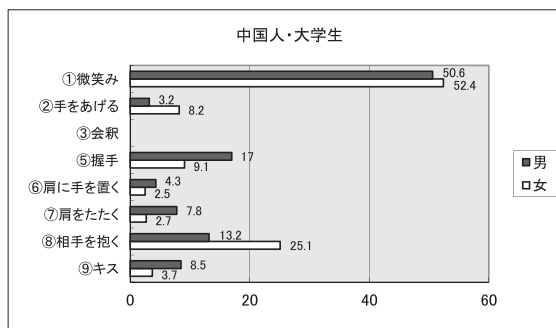
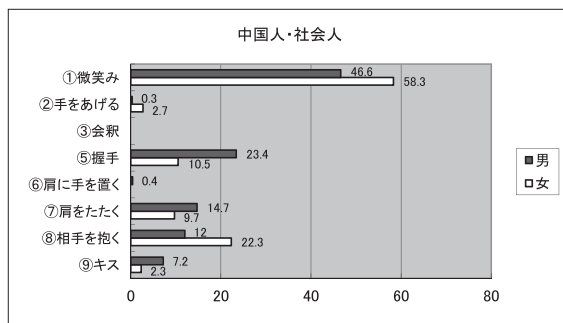


図8



日中両国では、Dさん（親・異性）に対する非言語行動はCさん（親・同性）に対するより身体接触の非言語行為が多様化を見せている。日本ではCさんの⑤⑥⑦に対して一層身体接触度の高い⑧「相手を抱く」が新たに加わり、中国では⑤⑥⑦⑧に⑨「キス」が加わった。これは異性となるものを家族（配偶者、兄弟姉妹など）または恋人と選択したことに大いに関係していると考えられる。つまり、人間関係が親しいほど身体接触の非言語行動が起きやすいと言ってもよい。

日本人について見れば、社会人では、異性という共通点のあるBさんと比べると、「親」のDさんは「会釈」が大きく減り、「お辞儀」もゼロにまで減少しているが、その代わりに「微笑み」と「手をあげる」が増えている。大学生では「微笑み」が顕著に増える傾向にある。また、親しさという点で共通したCさんと比べると、社会人では殆ど変動を見せずに、「微笑み」と「手をあげる」が依然高い比率を保っている。大学生もCさんと殆ど差が認められない。つまり、日本人は「親」の間柄にある相手に対して如何なる非言語行動をとるのかについては性別というより親疎の方がよく働いているようである。

一方、中国人では、社会人、大学生ともにBさんの場合と比べれば「会釈する」が大きく減り、ゼロとなっている。一方、身体接触は「握手する」「相手を抱く」などが大幅に増加している。また、親しいCさんの場合と比べると、「手をあげる」が大きく減り、「相手を抱く」「キス」等接触度の高い行動が増え、特に「相手を抱く」の増加が顕著であり、性別による差異を明らかに示している。

上述したように、今回は一つの試みとして日中両国のあいさつ言語行動における非言語行動、主に出会った時の非言語行動を取り上げて記述、分析した上で対照研究を施してみたところ、以下のことが纏



められる。

①疎、同性のAさんに対して、日中両国人はともに「微笑み」と「会釈」が主流となって、高い定型性を見せている。特に「微笑み」は圧倒的に一番高い比率で示しており、あいさつの共通した特徴であることが一層明確になった。「手を挙げる」が日本人の大学生、特に男性大学生に偏る傾向が著しく見られるのに対して中国人の方が皆無に近い結果は注目に値する。

②疎、異性のBさんに対して日本人は社会人、大学生ともに「微笑み」が減少し、その分、「会釈」と「お辞儀」が増えている。つまり、異性の相手により慎重な、遠慮深い態度で振舞おうとしている。一方、中国人は疎、同性のAさんと同じく「微笑み」と「会釈」に集中しており、定型化されている傾向を表している。

③親、同性のCさんに対して、日中両国人はともに相手に触れる「肩をたたく」「握手する」などの非言語行動が増加している。「握手する」と「微笑み」が日本人の男性に多く選択されることに注目を浴びる。一方、中国人は男性において「握手する」と「肩をたたく」、女性において「相手を抱く」がそれぞれ優勢であり、性別差がはっきり見られる。また、中国人の「相手を抱く」という身振りについて、日本人のゼロ比率と比べると、一層顕著となり、両者は著しく対照をなしている。

④親、異性のDさんに対して、日中両国人はともに親、同性のCさんより身体接触の高い非言語行動が多様化している。「相手を抱く」「キスする」それぞれ日本人、中国人に新たに加えられ、異性から生じてくる差異と考えられる。

全体的にいえば、特に注目したいのは「お辞儀」ということである。「お辞儀」は日本人の非言語行動の代表的な身振りであるとされているが、親の関係にあるCさんとDさんに対して、日本人の社会人、大学生、男女ともに「お辞儀」が減り、特に社会人では異性という共通点のあるBさんと比べると、親のDさんに対して「お辞儀」の比率はゼロにまで著しく減少している。つまり、「お辞儀」の使用は相手との人間関係、場面などによる制約を受けるものである。「お辞儀」は丁寧な「お辞儀」（腰を曲げ相手が見えなくなるまで上体を深々と下げる）、普通の「お辞儀」（軽く身を傾ける程度）と簡略な「会釈」（頭を下げる程度）に分けて考えることができ

る。一般的には、親しい関係であれば、「お辞儀」（軽く身を傾ける程度）「会釈」というフォーマルな行動は省略されることが以上の考察からも察知される。しかし、中国人と比べてみると、「お辞儀」はやはり日本的な非言語行動の一つであると言っても過言ではない。また、親疎の視点から考えると、疎のAさんとBさんより、親のCさんとDさんに対して、日中両国人はともに非言語行動は多種多様となり、身体接触度の高い選択肢が増加している。

## Ⅵ. 終わりに

以上の考察を通して、次の諸点が判明した。まず、両国の共通点を挙げてみよう。「微笑み」は非言語行動の中心的存在として単独か或いは他の身振り、しぐさなどと同時に行われる。性別を問わず親しいほど身体接触の非言語行動が増える傾向がある。両国とも親しい同性より親しい異性の方が身体接触の非言語行動の多様化を呈している。これはCさんの同性の身体接触非言語行為として日本人⑤「握手」⑥「肩に手を置く」⑦「肩をたたく」、中国人⑤⑥⑦⑧「相手を抱く」に対してDさんの異性は、それぞれ一つずつ身体接触度のより高い行為が増えたことから窺えよう。

相違点としては以下のようなことが言えよう。中国人は日本人より身体接触の非言語行動をあまり憚ることなく行う。なかんずく、男女を問わず人間関係が親しいほど身体接触の非言語行動の比率が高くなる傾向を見せている。更に、具体的にみると、抱擁行為は男性より女性の方が積極的にみえる。一方、「キス」は男性が高い比率を示している。同性間の抱擁行為は中国人ではあまり気にせずに行われているが、日本人では全く確認できない。つまり、日本人は同性間の「相手を抱く」などの行為については憚ることがある。同様に「キス」も日本人にあまり見られない身体接触の非言語行為である。換言すれば、日本人にとって、「距離」は大事な礼儀作法であること（元々武家の作法であり、現代ビジネスでも基本とされているのが小笠原流礼法）、相手が武器（日本刀）を持っていることを前提にして、身の危険、及び刀が相手に接触しないようにする、という礼法がその「距離」の根底にあるように思える。

また、日本人は男性が女性より身体接触の非言語行為を積極的に行うように見える。相手が異性であ

る場合は、同性の場合より一層積極的なようである。「お辞儀」については、中国人には見られない非言語行為であるが、日本人は親疎を問わずに用いて、「親」より「疎」の関係にある者に対して比率が高く、男性より女性の方が高い比率を示す。つまり、日本人的な「お辞儀」という非言語行為は「疎」の人間関係の中で男性より女性によく行われるものであると言ってよかろう。

日中両国語におけるあいさつ非言語行動についての対照研究は、はじめての試みであるため、これから新しい研究へ向けての基礎研究として位置づけられるべき性格のものと言えるが、取り扱う非言語行動の範囲、対象、場面なども検討の余地が多々ある。例えば、「微笑み」という非言語行動は単独でも使用できるし、他の非言語行動、例えば「会釈」「お辞儀」「手を挙げる」と同時に行うことも可能である。今回の調査においては単独型と複合型の区別はその厳密さが欠如している。今後は、方法論の修正などをしながら、あいさつ非言語行動の全容の解析に力を尽くしたい。

## 注

### 1 Trager, G.L. (1958) *Paralanguage: First approximation, in Studies in Linguistics*

Birdshistell, R.L. (1970) *Kinesics and Context: Essay on Body Motion Communication*. University of Pennsylvania Press.

Hall, E.T. (1963) *The Silent Language*. New York: Doubleday.  
国広正雄・長井善見ら訳 (1966) 『沈黙のこぼれ』 南雲堂

Hall, E.T. (1976) *Beyond Culture*. New York: Doubleday.

2 例えばBirdshistell (1970) は、対人コミュニケーションにおいては「二者間の対話では、言葉によって伝えられるメッセージは、全体の35%に過ぎず、残りの65%は話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間の取り方等、言葉以外の手段によって伝えられている」と論じている。

3 柳田国男 (1946) 『毎日の言葉』 創元社

飯豊毅一 (1957) 「あいさつ—おはようございます」 『言語生活』 71

鈴木孝夫 (1968) 「あいさつ論—あいさつの言語社会学の考察」 『言語生活』 196 『ことばと社会』 (1975) 中央公論に再収

石井庄司 (1968) 「新入社員の挨拶の難しさとそれを

救う道について」 『ことば』

田島毓堂 (1973) 「あいさつ」 『講座日本語の語彙⑨ 語誌 I』 明治書院

岩淵悦太郎 (1974) 『語源散策』 毎日新聞社

直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙する時』 大修館書店

宮崎朝子 (1981) 「挨拶英語の場合 日本語の場合」 『学究』 496

小林裕子 (1981) 「日本人とアメリカ人の挨拶行動—出会いの挨拶」 東京女子大学附属比較文化研究所紀要 第42巻

日高敏隆 & 新妻昭夫 (1981) 「挨拶—出会いの儀式化」 『言語』 vol10.No.4

藤崎康彦 (1981) 「あいさつの文化人類学」 『言語』 vol10.No.4

真田信治 (1981) 「あいさつ言葉の地域差」 『ことばシリーズ14 あいさつと言葉』 文化庁比嘉正範 (1981)

「あいさつの言語学」 『言語』 VOL.10 No.4

田中望 (1982) 「『別れ』の言語行動様式」 『言語生活』 363

奥津敬一郎・沼田善子 (1985) 「日・朝・中・英のあいさつ言葉」 『日本語学』 Vol.4 No.8

甲斐睦朗 (1985) 「現代日本語のあいさつ言葉について」 『国語国文学報』 42集

藤原与一 (1992) 『あいさつ言葉の世界』 続昭和 (—平成) 日本語方言の総合的研究 第三巻 武蔵野書院

4 陈松岑 (1989) 『礼貌语言』 商务印书馆出版

胡文钟 (1994) 『文化与交际』 上海教育出版社

顾希佳 (2001) 『礼仪与中国文化』 人民出版社

毕继万 1997 「汉英告别语的差异」 『语文建设』 第7期

徐萍飞 (2001) 「汉语礼貌表达法异同浅析」 『浙江大学学报』 第6期

5 小林祐子 (1975) 『身ぶり言語の日英比較』 エレック選書 ELEC出版部

小林祐子 (1991) 『しぐさの英語表現事典』 研究社

中野道雄 (1977) 『ジェスチャーの英語』 創元社

西原忠毅 (1984) 『ジェスチャー英語』 九州大学出版会

中野道雄・J.カーカップ (1985) 『ボディー・ランゲージ事典』 大修館書店

奥田寛 (1997) 『中国人の非言語コミュニケーション』 東方書店

多田道太郎 (1972) 『しぐさの日本文化』 筑摩書店  
角川文庫

- 野村雅一 (1996) 『身ぶりとしぐさの人類学』中公新書 中央公論社
- 菅原和孝・野村雅一編 (1996) 『コミュニケーションとしての身体』大修館書店
- 榎本智子 (2000) 「非言語」西田ひろ子編『異文化間コミュニケーション入門』創元社
- 久保田真弓 (2006) 「コミュニケーションにおける言語・非言語行動」町博光編集『講座・日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化』スリーエーネットワーク
- 東山安子・フォード.L. (1982a) 「日米のあいさつ行動の記号学的分析」『記号学研究2』日本記号学会編、北斗出版
- 東山安子・フォード.L. (1982b) 「身振りの日米比較：身振りの辞書・日本人の動作編」『言語の社会性と習得』秋山高二・山口常夫・F.C.パン編 文化評論出版
- 東山安子 (1990) 「非言語記号—Emblemの文化比較考」明海大学外国語学部論集第三集
- 東山安子 (1995) 「日本人の非言語コミュニケーション」橋本満弘・石井敏編『日本人のコミュニケーション』桐原書店
- 6 毕继万 (1995) 「非语言交际」胡文钟编『英美文化辞典』外语教学与研究出版社
- 毕继万 (1999) 『跨文化非语言交际』外语教学与研究出版社
- 贾玉新 (1998) 『跨文化交际学』外语教学与研究出版社
- 胡文钟 (1998) 『文化与交际』外语教学与研究出版社
- 袁彩虹 (2000) 「非语言行为在跨文化交际中的价值体现与外语教学」『解放军外国语学院学报』第4期
- 祝大鸣 (2000) 「论日语中独特的非语言交际形式」『日语学习与研究』第4期
- 王秀文 (2006) 「跨文化交际中的日语 副语言表现」『贵州民族学院学报』第2期
- 李庆祥 (2008) 「非语言交际与副语言表现」『日语学习与研究』第6期
- 庄和诚 (1995) 「论身势语及其符号功能」『外语与外语教学』第5期
- 唐振华 (1996) 「身势语的文化含义」『深圳大学学报』(人文社科版) 第1期
- 程千山 (2002) 「身势语与会话含意」『外语学刊』第2期
- 程放明、刘旭宝 (2005) 「体态语的中日语言表述异同」『日语学习与研究』第4期
- 吴宏 (2006) 「试论日语中非语言交际行为的含义」『解放军外国语学院学报』第5期
- 7 本調査を補足するために、面接、観察調査を合わせて行うことにした。例えば、アンケートを行う際に、回答者が内省によって答えたものに過ぎないといった限定を持っている点については、面接、観察調査という補足手段をもって確認した。
- 8 集計に当たっては、次のような手順によって行った。
- ①項目の回答はそれぞれの場合に選択肢を三つまで同時に選んでよい。そのため、ここでは解答欄にある三つの欄の総和の結果を提示する。回答集計としての、始めの欄だけの結果と、三つの欄の総和の結果とでは、選択された順位によってその比率が微動するが、全体としては有意的な格差は見られなかった。従って、今回の三つの欄の総和の結果を表示するに止めることとする。よって使用率は100%を超える場合もあり得る。また、「微笑み」という非言語行動は単独でも使用できるし、他の非言語行動、例えば「手を挙げる」と同時に行うことも可能である。つまり、表情と身振り、しぐさを合わせた複合形式も考えられる。ただし、今回はそれらを一括して「その他」として扱うこととする。
  - ②調査項目についての回答結果を示す際に、日中両国語においては社会人、大学生 それぞれ男女に分けて示すが、年齢別については、必要な場合では触れるが、図示はしないこととする。
  - ③「その他」及び無回答は表示しないのを原則とする。(回答の少なかったものは表に載せない)
  - ④「会釈」と「お辞儀」は両方とも頭を下げて礼をする行為であるが、会釈は「お辞儀」より軽く頭を下げるため、両者の間に見られる差異は、人間関係の上下関係による丁寧さの高低が反映される。つまり、「会釈」は「お辞儀」の一種であり、人に出会った際に軽いお辞儀で角度は15度が目安となるものである。今回調査を行う時に、「会釈」と「お辞儀」の区別及び注意点などについて、被調査者に説明を加えてみた。
- 9 具体的な内容について施暉 (2002) 広島大学文学部『国語学攷』を参照されたい。
- 10 Adan Kendon著 張凱訳 (2001) 『行為互動』社会科学文献出版社p201
- 11 麦倉達生 (2004) 『異文化理解へのアプローチ—ことばの窓から見る日独比較—』大学教育出版p5
- 12 同上11
- 13 小林祐子 (1975) 『身振り言語の日英比較』ELEC出版社

- 龔書鐸主編（1997）『中国近代文化概論』中華書局  
p311
- 14 楊存田（1994）『中国風俗概観』北京大学出版社p9
- 15 関彤編（1997）『社交礼儀』南海出版公司p131
- 16 蔡振生他著（1994）『中日文化比較』北京語言学院出版社p249
- 17 麦倉達生（2004）同11 p6
- 18 同上11
- 19 呉曉露他著（1994）『説漢語談文化』北京語言学院出版社p333
- 20 施暉（2005）「日中両国語における「あいさつ」言語行動についての比較研究」広島市立大学国際学部博士論文

**付録：調査票**

以下の質問に入る前に、次のような条件を満たす4人の人物を具体的に思い浮かべてください

- Aさん： 顔見知りであるがあまり親しくない同性の人
- Bさん： 顔見知りであるがあまり親しくない異性の人
- Cさん： 最も親しい同性の人（例えば友人、兄弟姉妹、親子など）
- Dさん： 最も親しい異性の人（例えば、配偶者、兄弟姉妹など）

今思い浮かべたA-Dさんに当てはまるものを、以下の選択肢から選んでそれぞれの番号を記入して下さい

1 学校（時代）の友人	2 近所の人	3 同僚	4 仕事上の知人
5 兄弟姉妹	6 親子	7 配偶者	8 親類

調査項目：「あなたが一人で街を歩いている時、Aさんに会ったとします。その時あいさつするとして、言葉のほかに身ぶりであいさつするとしたら、どんなふうになりますか」。

次の「身ぶりの選択肢」の中から適切なものを選んで下の（ ）の中にその番号を記入して下さい。順に三つまで記入してください。

身ぶりの選択肢

1 相手を見て微笑み	2 軽く手を上げる	3 会釈する	4 お辞儀をする
5 片手で握手する	6 両手で握手する	7 相手の肩に手をおく	8 相手の肩をたたく
9 相手を抱く	⑩ 頬擦りする	⑪ キスをする	⑫ その他

① Aさんに（ ）（ ）（ ） その他\_\_\_\_\_

② 同様にB、C、Dさんに会いました。その時の身ぶりはどうですか

Bさんに（ ）（ ）（ ） その他\_\_\_\_\_

Cさんに（ ）（ ）（ ） その他\_\_\_\_\_

Dさんに（ ）（ ）（ ） その他\_\_\_\_\_